

鳥に単は似合わない

人は誰でも、表には出さない人間性を奥深くに隠し持っている。それは時に残酷で、時に美しく、時に浅はかだ。今日紹介する本は、古代日本を彷彿とさせるきらびやかな架空の世界を舞台に、少女たちの成長と隠れた姿を描き出す物語である。

舞台は八咫鳥の暮らす山内。族長の世継ぎ、若宮の妃選びを行うため、桜花宮に4人の少女が集められる。

「それ以来、ずっと、お慕い申し上げておりました……」

——世間知らずでおっとりしているが琴の腕は超一流、あせび
「うつけだろうがなんだろうが、アタシはあの男を愛しているよ」

——挑発的で皮肉な言動が目立つが飾らず人情に厚い、浜木綿
「入内するのはこのわたくしだから、関係はないのだけれど！」

——高飛車な性格で幼い頃からの恋心はゆるぎない、真緒の薄
「あたくしは入内するためだけに生まれてきた女ですもの」

——誇り高く家のためならすべてを投げ出す覚悟を持つ、白珠

彼女たちはそれぞれ、政界の派閥争いを繰り広げる四家から遣わされ、家の安定と繁栄をもたらすべきものとしての責任を負わされてきた。政治的野心の渦巻く宮中で、少女たちはそれぞれに衝突しつつも、絆を強めながら高め合っていく。しかし肝心の若宮は一向に桜花宮を訪れない。疑念の深まる中、女房の死や不審者の侵入などさまざまな事件が起こる。

4人の少女は若宮に対するそれぞれの思いを胸に登殿を望む。それぞれ強い個性をもった彼女たちに、初めは反感も抱くかもしれない。しかし、物語が進み、それぞれの心が明らかになるにつれて印象が変わっていく。彼女たちの置かれた環境は我々の日常とは程遠いが、若宮に認められようと努力する姿に共感したり応援したくなったりする場面がきっとある。結末で少女たちがひた隠しにしていた思いが明らかになった時、あなたは何を感じるだろうか。また、その思いを知った時、あなたの眼に彼女たちの姿はどう映るだろうか。彼女たちの一挙一動に注目してほしい。そして、若宮が選ぶのは誰か、少女たちの恋の行方はどうか、見届けてほしい。



鳥に単は似合わない

著者：阿部智里

出版：文藝春秋

価格：670円（税別）